

私の中の大きな経験から

南国市立香長中学校

一年

川竹

晴大

私は小学生のころにガンになりました。ガンの治療で体の中に抗癌剤という薬を入れるために首の下にチューブを入れガンを治していきました。そして治り、チューブを取り、その場所があとになつて残ったことと、抗癌剤で髪が全て抜けてしまったことが心に残る二つの大きな経験につながっていきます。

一つ目の大きな経験は、髪が抜けているので学校にニット帽をかぶって行っていて、そのニット帽に対してひやかされたり、からかわれたり、ぬがされたりしたことです。

そのようなことをされて私は治ったのになぜそういうことをするのかとても疑問に思いました。私は、その場にいるのがはずかしくなり、その場から逃げ出したいと思う日もありました。

二つ目の大きな経験はさしていたチューブを抜いた所の傷のことをバカにされたり悪口を言われたこととです。ここで言うチューブとはCV（中心静脈）カテーテルのこととで体内に入れる管のことを言います。点滴や注射を行うために、胸のところや鎖骨や首、太ももの付け根にある血管から管を入れて管の

先を体の中心近くの血管まで届かせるものです。入院当初管を入れ、薬は管から入れるので直接肌からの注射をしなかったことはよかったですけれど、寝る向きも気になったり、動くにもじやまと思うことがたくさんありました。でも二十四時間を「共」にし、先生と私をつなぐ「管」、そして、私の命をつなぐ「管」でした。

その傷は私にとって病気と戦ったあかし、ほこりの傷です。その傷を周りからは、「キモッ。」「こつち来んな。」「第三のちくびや。」などひどい言葉をたくさん言われ、とても辛かったです。周りは遊び半分で言っているかもしれないと思いますが、私にはすごく辛い悪口を言われているようにしか思えませんでした。私はこのようなことから、人それぞれこれまで生きてきた中でいろいろな経験をしてきている人がたくさんいると感じました。中には昔、大きな病気や事故等で傷や後遺症等を抱えている人もたくさんいます。それなのに、そのような人たちへの悪口やバカにする等の行為がその人たちにとってうれしい言葉なのかを想像してみてください。そうすると、今までそれが良かったことか悪かったことかが分かると思います。私は「人を見た目で判断してはいけない」「人を否定してはいけない」と思います。

私は病気と向き合うことで友達、先生、両親、親

せきの優しさ、ありがたさを改めて知ることができ、普通の生活は当たり前じゃない。今生きていることが幸せと感じました。私の今の幸せは、学校に行けて勉強ができること、部活（陸上部）でおもいきり走ること、友達と遊べること、そして家族とケンカもするけど笑って過ごせることです。命があるからその幸せを実感できます。

これからも、いろんな場面にそうぐうすると思いますが、困っている人がいたら見て見ぬ振りをせず、相手の気持ちを分かってくれ、相手のことを思いやってみて多くの人に命の大切さを発信していきます。